

わたしの居場所はどこかしら

三 木 メ イ

奨励者紹介[みき・めい]

同志社大学キリスト教文化センター助教

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(女性学、人間関係、牧会)

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」

(マタイによる福音書 7章7―12節)

新年度、新生活の始まり

新年度春学期最初の水曜チャペル・アワーです。4月の最初というのは、新年度のスタートですから、それに伴って新生活を始めている人々は多くいます。この場所に集まった皆さんの中にも、この4月から全く新たな環境で大学生活を始めたという人もいるでしょう。大学では、新入生であれ在學生であれ、まず新年度が始まる前に自分がどのクラスの授業を履修するか選んで登録しなくてはなりません。皆さん無事に履修登録手続きができたでしょうか。授業の内容は、シラバスを見て先輩や友人から情報を得て考えた人が多いでしょうが、実際のところは受講してみないとわからないですね。でも、自分が考えて選んだのですから、どうなるのかなと思いつつも、とりあえずできるだけ頑張ってそこで勉強してみてください。

自分の受講クラスを決めるということも、自分の新たな居場所を探す作業の一つと言えるだろう、と私は思います。この広い大学キャンパスの中で、自分がどの教室に行き何を学ぶのかを探して決める。それは大学という組織が高等教育を行うために、学生の皆さんに準備している「居場所」になるわけです。たくさん与えられているプログラムの中から、学生の皆さんが選ぶことができる「居場所」です。

もう一つは、クラブやサークルの中に自分の居場所を見つけたい、という人も多いでしょう。在校生たちも自分のサークルに新入生を勧誘するのに、今一生懸命になっています。やってみたいと思うことを先輩や仲間と楽しく自由にやって、多くの友人ができれば、学生時代がますます楽しく充実したものになり、自分も成長できるでしょう。そこでの豊かな人間関係によって、さらに新たな自分の居場所を見いだすことができるのではないのでしょうか。

私にとって「居場所」とは

「居場所」という言葉が一般的に使われるようになったのは、少し調べてみますと、約20年ほど前から

のようです。それ以前は今のようによく使われる言葉ではなかったと思います。もともとは、不登校の生徒が、通常の学校や家庭以外のところに居てもいい場所が必要だ、ということで子どもたちのための「フリースクール」とか「フリースペース」が作られるようになった、と聞いています。

つまり、どこにも居る場所がないと感じている人たちが安心して居られる場所、という意味で使われていたのです。しかし、最近はもっと一般的に用いられるようになって、たとえば、自分の能力を充分に発揮できるところ、という意味も含まれていたりします。そして、子どものために大人が準備する子どもの居場所ということだけでなく、若者や大人や高齢者など、年齢に関係なく使われるようになって、それぞれの居場所をそれぞれが求めている、という意味で「居場所」という言葉がよく使われるようになったと思います。逆に言うと、年齢に関係なく、いつも何となく自分の居場所が見つからないと感じている人が増えた、ということかもしれません。「ここは、本当は自分の居るべき場所ではないのではないか」と疑念を抱きながら、あちこち彷徨っている人が多いのかもしれない。

そのせいかどうかはわかりませんが、『置かれた場所で咲きなさい』という本を渡辺和子さんというシスターが執筆して出版されて、結構話題になりました。この方は、ご自分が学校長としての仕事に就いた頃にかなり悩まれたそうで、自分は本来この仕事に就くべきではなかったのかもしれないと思いながらも、とにかく一生懸命やっていると、だんだんその立場で自分がなすべきことやその意味が見えてきた、ということなどをお書きになっています。

「居場所」というと誰かが準備してくれて、自分は受け身で居心地がいい場所というイメージがあります。しかし、社会の中で自分が仕事をする、あるいは自分が何らかの役割を果たす、という場合はかなり違ってきます。人から与えられた仕事であっても、自分の能力を発揮する積極性が求められます。そうして他の人に役立つ働きをして、周りの人々が認めてくれて、信頼関係が成り立っていくことによって、そこに自分の「居場所」ができてくる、ということです。おそらくそこまで行くには、頑張らなきゃというプレッシャーや、これでいいのかと悩みながら頑張らないといけなideでしょう。

人生は「居場所探し」の旅

しかし、人間はいつも、いつまでも人に役立つ存在であり続けることができるか、と言うと、そうでない場合もあります。病氣や怪我で仕事が続けられなくなるというようなことが起こる場合もあります。そうでなかったとしても、年をとって定年退職した後にも、自分の居場所を求めていく必要があります。また、体の衰えを感じる人々は何らかのかたちでケアをしてもらえる居場所を見つける必要がありますが、なかなか難しくなっています。日本はすでに高齢化社会を迎えていますから、それは社会的な問題になっています。

こういうふうを考えていくと、人の人生は、年齢がいくつになっても、それぞれ自分の生きるべき居場所を探しながら、いつも旅をしているようなものなのですね。「居場所探し」の旅です。そして、その旅を一人ひとりがどう歩んでいくか、何を大切にしていくか、それによって歩む方向がそれぞれ違ってきます。その旅ができるだけ充実した、豊かで楽しい、幸福をもたらすものであってほしいと誰もが願いますし、もし苦しいことや困難なことがあっても、それによってより良く成長して、次の場所に行くための糧としていければ、それは最も望ましいことだと思います。

この大学の学習環境はかなり整えられていますので、学生の皆さんはそれを大いに活用して新たな居場所を見いだして、どんどん成長していったほしいと思います。そして、次のステップとなる社会へ向かって巣立つ備えをしっかりとしてください。

ただ、その人生の旅は、自分の思い通りにはいかないこともたくさんあります。それはすでに経験したという人もいるでしょう。本当はここではなく別の大学に行きたかったのに、という人もいるでしょう。それから、よく「五月病」と言ったりしますが、夢と希望に溢れて大学に入学したのだけれど、入ってみたら自分が思い描いていたほど素晴らしい場所ではなかったな、とがっかりして勉強する気力が落ちてしまう、という場合もあります。旅をする、というのは、自由に新しい出会いや体験ができる、新たな可能性が見いだせるという喜びや楽しみがあります。その一方で、この先がどうなるのかわからないという不安がありますし、今までずっと居た場所にそのままいたほうが楽なのに、と感じたりすることもありますね。でも、とにかく私たちは毎日、旅をしているのです。旅していかなざるを得ない生き物なのです。

聖書に出てくる人たちの「旅」

旧約聖書の中に、神様が登場人物に旅をしなさい、と言っている箇所がいくつもあります。例えば、創世記12章の最初には、こう書いてあります。

「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷 父の家を離れて わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にし あなたを祝福し、あなたの名を高める 祝福の源となるように』」（創世記12章1～2節）。

このアブラムという人物は遊牧民生活をしています。お父さんと家族と家畜と移住しながら生活していたのですが、お父さんが亡くなった後に、神様から聞いた言葉です。主なる神が示す地に向かって旅をすれば、神様が祝福してくださる、と言うのです。アブラムは、この言葉を聞いて旅に出て、ある土地に着いた時に、神様から救いの契約をいただく、ということになります。だから、神様の導きに従って、勇気をもって、自分が行くべき新たな場所を目指して旅して行きなさいよ、というメッセージが込められている箇所です。

それから、もう一つご紹介したいのは、神様がモーセに言った言葉で、出エジプト記に書いてあります。

「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」（出エジプト記3章10節）。

モーセはこの言葉に従って、たくさんの人々と一緒にエジプトを旅立って、40年かけて「乳と蜜の流れる地」=つまりその人々が差別されることなく安心して暮らせるすばらしいところへ旅をして連れていくことになります。そして、その旅の中でさまざまな危機的な出来事が起こってくるのですが、いつも神様がモーセと人々を助けてくれて、何とか困難な状況を乗り越えて、安住の地（彼らにとっての本来居るべき場所）に向かって、旅を続けていくのです。

こういう物語を語り伝えてきた人々は、これを読む人々に、人がこの世で生きるというすべての旅を、神さまが導いてくださると信じて歩いていけばいいのだよ、というメッセージを伝えたかったのではないかと私は思います。

「求めよ」「探せよ」

「神」とか「救い」という言葉が、聖書にはたくさん出てくるので、それを聞くと皆さんの中には、「私は神を信じていないから関係ない」とか、「私は救いを求めるほど不幸ではないから関係ない」と思う人が多いかもしれません。しかし、「救い」ということを、人が本当に喜びをもって自分らしく居られる場所やそういう関係性の中で生きられること、というふうに考えるとどうでしょうか。それはすべての人がいつも探し求めている「居場所」なのではないでしょうか。それは、ただ待っていれば向こうから勝手にやって来るというものではなくて、自分自身で一生懸命求めていくこと、探していかななくてはならないものなのです。そうやって一生懸命に居場所を求めて彷徨う私たち人間を、支えてくれるもの、導いてくれるもの、目には見えないけれど背中を押してくれるもの、を「神」という言葉で表している、と考えてみてください。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる」というこの聖書箇所は、何について言っているか簡単に言うと「神の救いを求めなさい」という意味なのです。それはまた、この世を旅するすべての人、自分の居場所を求めているすべての人々への励ましのメッセージになっているのがわかるでしょうか。そして、最後に大切なメッセージが書かれているのを見逃さないでください。

「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」。それが、本当に喜びをもって生きられる居場所探しの旅において、一番大切だと聖書は語っているのです。自分を愛するように隣人を愛する、他の人たちのことを大切に考えながら、自分の旅を続けていくこと、そうすれば「与えられる」、そうすれば「見つかる」のです。

さあ、あなたの居場所はどこにあるでしょうか。探し求めていきましょう。